



# ちょっとそこまで ～お散歩日和 (植物編)～



## アロエ



その昔、我が家の庭先には大量のアロエが繁茂していました。アロエとは呼ばずに「医者いらず」が正式名称だと思っていたほどに、何かあると重宝して使っていました。外傷や打ち身、捻挫、やけどはもとより、当時は胃弱な子供でしたから、かなりの頻度で実をすりつぶして飲んでいた記憶があります。



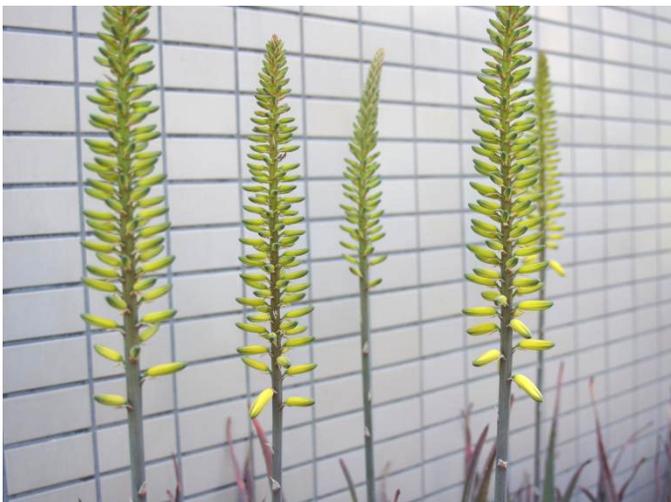
最近、桜台の寿司屋に行った際、アロエがメニューにあったので懐かしさから注文してしまいました。すると板前さんが店先に出て葉を切ってきて、中のゼリー状の果肉を薄切りにするとシャリの上にちょこんと載せて出してきました。苦みも何も味がせず美味しくも何ともないのですが、まあ、こうして話のネタにはなったので、元は取れたと言えるでしょう。



さて、6号棟の東側の壁面に沿って、そのアロエが一行に植栽されています。サボテンの仲間だと思われがちですが、ユリ科の多年生の多肉植物です。アロエとは、アラビア語で「苦い」世界には600種類以上あるとされていますが、日本でアロエというと、葉の細いキダチアロエのことを長い間指していました。しかし、当団地のアロエは肉厚のアロエベラです。アロエベラの葉は大きく、根元近くの葉の長さは約70～80cm、幅は10cm前後、厚みも3cmほどもあります。大きな葉なら、1枚の葉の重さは1～2kgはあるでしょうが、そうした葉が20枚近く集まって1つの株を形成しています。

キダチアロエの学名は「アロエ・アルボレッセンス・ミラー」と言います。意味は「ミラー氏命名の、やや小高い木になるアロエ」ですが、その後、バーガーさんという植物学者が「日本のキダチアロエは、南アフリカ・ナタール原産のナタレンシスというバリエーション (ヴァル) である」と確認したことで、「アロエ・アルボレッセンス・ミラー・ヴァル・ナタレンシス・バーガー」という何とも長い名前になりました。

一方のアロエベラの方は「アロエ・バルバデンシス・ミラー」ですが、「ミラー氏命名の、バルバドス島 (西インド諸島) に自生するアロエ」という意味です。しかし、別な植物学者が「これこそ真のアロエ」だと「アロエベラ」とし、通称として広く使われるようになりました。「ベラ」とは真実という意味です。



先ほどの触れたように、葉は肉厚で、先が尖り、葉縁には鋸葉またはトゲがあります。葉の付き方はロゼット状で、横から見ると逆円錐状に広がっていきます。当団地では黄色ですが、一般的には朱色ないし黄色の花が咲きます。花被は管状で、花被片は6弁あり基部で合着しています。雌しべ1つに対して雄しべは6つあり、花の形状はまるでバナナの房のようで、花茎は1m近くまで伸びます。

ところで、あのクレオパトラも、アロエベラを愛用したと言われています。オリーブとアロエのエキスを肌に塗り、美肌を保ったと言われていますが、これは現代の科学をしても納得の美容法と言えるようです。それから、アレキサンダー大王も遠征先に持ち歩いたとの記録もあります。

その効能については昔から広く認知されていることですが、最近では老化防止の観点からも大きく見直されているようです。

健康法の話になると、必ず「活性酸素」という言葉が出てきます。クギを空気中に放っておくと赤くサビて、最後にはボロボロになってしまいますが、その原因は酸素であることは周知のことです。

活性酸素も、カラダのなかで、このクギと同じことを起こすのです。一言で言えばカラダの細胞をサビさせ、カラダの機能を衰えさせてしまうのです。これが老化現象です。

もともと私たちのカラダには、活性酸素を消す酵素（抗酸化酵素）があるのですが、年齢を重ねると、その酵素が減ってしまいます。このときビタミンA、C、E、B群などが働き、活性酸素を消してくれます。これを抗酸化作用と言います。面白いのは、ビタミンCやE単独の場合よりもアロエベラと一緒に服用すると、抗酸化の働きが良くなるということです。ワクチンなどでも話題になったアジュバント効果です。簡単に言うと、細胞をサビから守るパワーが強力になるわけで、アンチエイジングの強い味方になるということです。



興味がわいたら、アロエベラの根元に子株がたくさんできていますから、株分けして育ててみてください。

ところで、光ヶ丘公園の外周を走っていると、ちょうど北西の位置にある「あけぼの橋」前の信号脇の街路に、巨大なアロエに似た植物が立っています。お気づきになられている方もいらっしゃるでしょう。リュウゼツランです。姿はアロエに似ていますが、種としてはユッカ（日本での代表種はキミガヨラン）・ドラセナの仲間です。滅多に花を咲かせないことでも有名ですが、興味深いのは、このリュウゼツランの葉から取り出す樹液を発酵させて作るのがテキーラだということです。

陽気なラテン音楽の名曲に「テキーラ」があって、どうしても情熱的なお酒というイメージが先行してしまいます。しかし、例えば、イーグルスのグレン・フライが歌う「テキーラ・サンライズ」を聞くと、何とも上品で甘美な味わいに変身します。オレンジジュースが日の出をイメージさせ、この命名になったようです。

(終)

